



そのころ事故現場はまるで戦場のようなありさまだった。あたり一面に煙がたちこめ鼻をつくような油のにおい。ウーウーウー。けたたましく鳴りひびくサイレン。そんな中を必死で救助活動にあたる人々。

消防団員 おーい。早く担架を持って来い。

消防団員 ひどいけがをしている人がいるんだ。

遠くの方からは、悲鳴にも似た声。

消防団員 この人は、もうダメだ。血だらけだ。

担架で運び出される重傷者。その中にあきおのお母さんもいた。

墜落現場はこの世の地獄図

惨事は、ちょうどお昼前に起きた。楽しい昼食の食卓が一転して恐怖のドン底に落ちた。一瞬、声ならぬ恐怖の音が渦巻いた。八日正午のミュージックサイレンが鳴り渡る直前、墜落。泉二丁目の人家密集地帯は、この世の地獄図を現出した。ジェット機のドスーンという音とともに火は両側の民家をナメて突っ走った。それが強い風とアラレにたたかれ、黒い煙が高く立ちのぼる。市内から集まった約六十台、八百人の消防団員が懸命の放水。だが、メラメラと燃えた家は、ドシンと音をたててくずれ。しかも火勢とあたり一帯に立ちこめる濃い煙のため事故の中心地はどうなっているのか、どこがどのようにやられているのかさえ、わからないありさまだ。火がようやくおさまりかけたのは午後二時すぎ。そのころ宇野さん宅の焼け跡から黒コゲになった二遺体があることがわかった。死体のそばでは、まだ煙が立ちこめ、冷たい雨がときおり降りそそぎ、現場は悲惨な感じが一番深まる。

宇野さん宅の近くからは、ヘシ曲がりくぼんでしまったエンジン部分が出てきた。また、燃えなかった家も、ジェット機の破片で壁は機関銃で撃ったように穴があき、さんさんたるありさま。